

Osaka Symphony Orchestra

PROGRAM

MAGAZINE

2025/2026 *1.2*
January February

- 
- ▶ 第138回 名曲コンサート
2026.1/18 (日)
 - ▶ 第285回 定期演奏会
2026.1/30 (金)
 - ▶ 第286回 定期演奏会
2026.2/22 (日)



公益社団法人
大阪交響楽団

本日はご来場いただき、ありがとうございます。
コンサートをお楽しみいただくために
みなさまのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

●電源OFF

演奏中に、時計や携帯電話のアラーム音、補聴器のハウリング音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

●音に注意

パンフレットをめくる音、のど飴の包み紙のカサコソ、アクセサリが立てる音、ストラップの鈴など、コンサートホールでは思いのほか聞こえるものです。

●撮影・録音禁止

録音・録画・写真撮影（スマートフォン等を含む）は固くお断りいたします。

●余韻を楽しむ

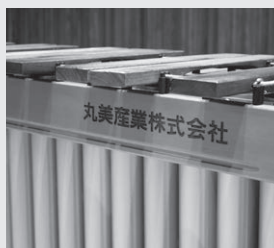
演奏後の余韻も演奏会の楽しみのひとつ。最後の音が消えていき、そして静寂の後に湧き起こる拍手。お客様と演奏者ともに音楽の歓びにひたるひと時です。拍手のタイミングにご配慮ください。

名曲コンサート の終演後カーテンコールを撮影していただけます

- 撮影はスマートフォン・携帯電話のみ、自席にご着席のまま行い、動画の撮影はご遠慮ください。
- アンコール演奏中の撮影はご遠慮ください
- フラッシュの使用はお控えください
- 自撮り棒などの使用はお控えください
- 手を高く上げての撮影など周りのお客様のご迷惑となる行為にご注意ください
- SNS投稿の際は、ほかのお客様の写り込みにご注意ください
- 演奏中はスマートフォン、携帯電話の電源をお切りください（録音・録画は違法行為です）



【表紙の楽器】マリンバ



丸美産業株式会社様(名古屋市)は、創業100周年を迎えられた2020年、感謝と森林保護への思いをこめて、世界に一台だけのマリンバを製作されました。一般的にマリンバにはローズウッドが用いられるのですが、同社が創業以来向き合い続けてこられた建築材のひとつであるイペ材(ローズウッド同様堅い木材で美しい木目をもつ)から、姿も音色も美しいマリンバが生まれました。このプロジェクトに関わられた金城学院大学教授の都築 徹氏から、共に教授を務める当楽団首席客演指揮者高橋直史氏を通じて、このたび大阪交響楽団に寄贈いただきました。

第138回 名曲コンサート

2026. 1/18(日)

会場／ザ・シンフォニーホール

開演／14:00 [13:00開場]・13:45〜プレトーク

「音楽と美術Ⅱ」

演奏者

指揮／高橋 直史(首席客演指揮者)

ヴァイオリン／ルエン・リー

曲 目

モーリス・ラヴェル

亡き王女のためのパヴァーヌ (約 6 分)

Maurice Ravel: Pavane pour une infante défunte

フェリックス・メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 (約 26 分)

Felix Mendelssohn: Violin Concerto E Minor Op.64

I Allegro molto appassionato

II Andante

III Allegretto non troppo - Allegro molto vivace

休憩

モデスト・ムソルグスキー／モーリス・ラヴェル編

組曲「展覧会の絵」(約 35 分)

Modest Mussorgsky: Pictures at an Exhibition, suite orchestrated by Maurice Ravel

1. プロムナード〜ノーム(こびと)
2. プロムナード〜古い城
3. プロムナード〜チュイルリーの庭
4. ブイドロ
5. プロムナード〜卵のからをつけたひなの踊り
6. サミュエル・ゴールデンベルクとシュミユイレ
7. リモージュの市場
8. カタコンブ〜死せる言葉による死者への話しかけ
9. バーバ・ヤガーの小屋
10. キエフ(キーウ)の大きな門

主 催／公益社団法人 大阪交響楽団

特別協賛／大和ハウス工業株式会社

後 援／堺市

協 力／ザ・シンフォニーホール、

公益財団法人 堺市文化振興財団

関 西 か ら



関西元氣文化圏
参加事業

日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION

特別協力／ Supported by

日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION



指揮
conductor

高橋 直史

Naoshi Takahashi

大阪交響楽団
首席客演指揮者

東京藝術大学指揮科卒業、同大学大学院修了。国際ロータリー財団奨学生として渡独し、ミュンヘン音楽・演劇大学大学院指揮科修了。その後文化庁派遣芸術家在外研修員としてバイエルン州立歌劇場で研鑽を積む。在独中にブランデンブルク歌劇場客演指揮者、オズナブリュック歌劇場専属指揮者兼コルペティール、エルツゲビルゲ歌劇場第一指揮者、その後音楽総監督及び同交響楽団首席指揮者を歴任。2021年に15年間続けた音楽総監督を退任し、日本に音楽活動の場を移す。2022年4月より大阪交響楽団首席客演指揮者に就任。また、金城学院大学文学部音楽芸術学科教授として後進の育成に力を入れている。

ドイツ・エルツゲビルゲ響に於いては、毎年日本人作曲家による作品を取り上げるなど、そのオーケストラのレパートリーを大幅に拡充し、ドイツの現代作曲家シュミット・コヴァルスキーによる作品の初演・CD録音を始め、メンデルスゾーン、シューマン、日本人作曲家によるギター協奏曲集(ソリスト:谷辺昌央)等の録音によりその充実した演奏が記録されている。また、同地ではペーター・レーゼル、ヨッヘン・コヴァルスキー、ペーター・ダム等、往年のマエストロとの共演も特筆される。

新日本フィル、読響、名フィル、セントラル愛知響、大阪響、東響、日フィル、ドイツ・エルブランド響、ブランデンブルク市立歌劇場、オズナブリュック歌劇場、アウグスブルク歌劇場、エルツゲビルゲ歌劇場、チェコ・プラハ国立歌劇場、ピルゼン放送響等、オペラ、コンサートの双方において国内外のオーケストラと共演すると同時に、NHKカルチャー講師としてオペラ講座を担当するなど、音楽の魅力を広めるべく講演活動も行う。

シェフからのメッセージ

音楽とその他の芸術との関わりを基に様々な視点から「音楽」をもう一度深掘りしてみようというこのシリーズ。今回で早くも4回目を迎えることになりました。今日は音楽と〇〇シリーズの原点に立ち返り、再び美術・絵画との関わりにフォーカスを当てたいと思います。

まずはラヴェル。「亡き王女のためのパヴァーヌ」は、17世紀のスペイン宮廷画家であったベラスケスが描いた、マルガリータ王女の肖像画からインスピレーションを得て作曲したといわれています。しかし、この郷愁を誘う音楽は、ラヴェル自身のルーツにも由来すると考えられるのです。ラヴェルの母マリアはスペイン出身でスペイン語を話し、ラヴェルは母の歌うスペイン音楽を聴いて育ちました。その故郷を想う気持ちがパヴァーヌに入っているのではないかとと思われるのですが、ピアノの原曲を管弦楽に編曲した際出版された楽譜には、原曲初版譜のテンポ表示である♩＝80から、♩＝54という大幅な速度の低下が指示されています。オーケストラならではの響きに加え、ゆっくり演奏する事でその郷愁の表情が増しているのは、最愛の母の故郷を懐かしむ気持ちがより深く作用しているのかもしれません。

次はメンデルスゾーン。自身が監督を務め、その名をヨーロッパ中に轟かしていたゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターであったダヴィッド宛て1838年の手紙の中に、「来年の冬までには、あなたにヴァイオリン協

奏曲を作曲して差し上げたい。私の頭の中から離れないホ短調の曲があるのです」と書いています(作品の完成は1844年)。玄人はだしの絵を描いていたメンデルスゾーンは、1838年に自分が住んでいるアパートから見たライプツィヒのトーマス教会の風景画を残しています(P8)。情景を音楽にしようとしたメンデルスゾーンが見ていた風景、その冬のドイツの風景が、寂しさの中に激しい情熱を感じる第1楽章に影響を与えたのかもしれませんが、さらにその地で温かい家庭を築き、心の平穏を得た事が第2楽章に、音楽家としての華々しい成功が第3楽章に影響を与えたのかもしれないと考え、イメージネーションが膨らみます。

最後にムソルグスキー。政治的にも文化的にも虐げられた故郷、ロシア独自の芸術を生み出したいと願い、その思いを共にした親友、画家ハルトマンの死をきっかけに、彼の絵画とその思いを音楽の形で残そうと考え、この「展覧会の絵」を作曲しました。ムソルグスキーは、ハルトマンの絵をただ音楽に表わしたのではなく、「ブイドロ」において虐げられた人々をテーマにし、「カタコンベ」では死者に語り掛けたように、ハルトマンの思いをも音楽にしました。また終曲である「キエフ(キウ)の大門」では、二人の故郷の未来への強い思いが、堂々たるフィナーレに結びついたと考えられます。その思いをピアノのために書かれた原曲から読み取って、壮大なオーケストラ曲にしたラヴェルの腕前も必聴ですね。

日本音楽財団は、1974年に日本国内の音楽文化の振興と普及を目的として設立され、創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献を目的として弦楽器名器の貸与事業を行っている。保有する世界最高クラスの弦楽器21挺（ストラディヴァリウス製ヴァイオリン15挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、グアルネリ・デル・ジェス製ヴァイオリン2挺）を若手有望演奏家や世界で活躍する演奏家に国籍を問わず無償で貸与し、同時に、これら世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するための保守・保全を行っている。また、楽器被貸与者による演奏会を日本国内外で開催し、名器の音色に触れる機会を提供している。日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的な支援により実施されている。

ストラディヴァリウス1735年製 ヴァイオリン「サマズィユ」

Stradivarius 1735 Violin "Samazeuilh"



この楽器は、1836年に楽器商のルイジ・タリシオ（1796～1854）によってイタリアからフランスへ持ち込まれ、1909年にはサマズィユ家が所有していたことから「サマズィユ」と呼ばれている。1923年に楽器を所有することになったヴァイオリンの巨匠ミッシェル・エルマン（1891～1967）は「ストラディヴァリウスの中で最高の音色を持つ楽器の1つ」と1926年に手紙に記している。楽器の内側のラベルには製作時の年齢である91歳と書かれている。この楽器は、日本の篤志家からのご寄付と日本財団からの助成により、2017年8月に購入した。



©Kevin Condon

ヴァイオリン

violin

ルエン・リー

Lun Li

中国上海出身のヴァイオリニスト、ルエン・リーは、2021年にヤング・コンサート・アーティスト・スーザン・ワズワース国際オーディションで第1位、また、同年のリリアン&モーリス・バーバッシュJ.S. バッハ・コンクールでも第1位を獲得した。

2024-25年シーズンのハイライトには、東京交響楽団、バンゴー交響楽団、スプリングス室内管弦楽団との協奏曲での共演が含まれる。また、リンカーン・センター室内楽協会とのアジアツアー、YCAとのアメリカツアーにも参加している。2025-26年シーズンには、ソリストとして大阪交響楽団および京都市交響楽団との共演のほか、リンカーン・センター室内楽協会のシーズン開幕公演への出演などを控えている。

これまでにカーネギー・ホール、92Y、ベルリン・コンツェルトハウス、ドレスデン文化宮殿、ウィーン・コンツェルトハウスなど、主要な会場で演奏を行う。

室内楽にも強い情熱を持つリーは、バード音楽祭、ベイ室内楽コンサート、ニューポート・クラシカル、マールボロ音楽祭、ヴェルビエ音楽祭、ミュージック・アット・メンロー、エンジェル・ファイアー音楽祭、ティペット・ライズ音楽祭に出演。

2020年カーティス音楽院で学士卒、2022年ジュリアード音楽院で修士、2024年アーティスト・ディプロマ修了。主に、アイダ・カヴァフィアン、キャサリン・チョー、ジョセフ・リンの各氏に師事した。現在はジュリアード音楽院でキャサリン・チョーのティーチング・アシスタントを務めている。

日本音楽財団から貸与されたストラディヴァリウス1735年製ヴァイオリン「サマズィユ」を使用している。

モーリス・ラヴェル(1875-1937)

亡き王女のためのパヴァーヌ

モーリス・ラヴェル(1875-1937)の《亡き王女のためのパヴァーヌ》は、ラヴェルがまだパリ音楽院でガブリエル・フォーレに作曲を学んでいた1899年に、まずピアノ曲として作曲された。この曲は初演時から非常に好評で、1910年にはラヴェル自身が管弦楽編曲を行っている。現在ではピアノ版と管弦楽版の両方が、ラヴェルの代表作としてしばしば演奏されている。

パヴァーヌとは、16世紀のヨーロッパで一般的だった行列舞踏(列を作ってゆっくりと歩くような舞踏)のことだ。曲のタイトルについてラヴェルは「タイトルは曲と何の関係もありません。言葉の響きが気に入ったので(「亡き王女 *infante defunte* という言葉は韻を踏んでいる)そう決めたままです。これは死んだ子供を吊う哀歌ではなく、ベラスケスが描いたような若い王女が踊ったかもしれないパヴァーヌを喚起させるものなのです。」と語っている。彼は、暗すぎる演奏を聴くと「これではまるで、死んだ王女ではなくて死んだパヴァーヌだ」と皮肉を言っていたという。

曲は、A-B-A-C-Aというロンド形式で、主題が音程や伴奏の形を変えて3度繰り返される間に、二つのエピソードが挟まれる。第1のエピソード(B)には「非常に遠く」という指示があり、ppで始まる。第2のエピソード(C)はより変化に富み、全曲のクライマックスとなっている。



ディエゴ・ベラスケス:「ラス・メニーナス」
提供:Bridgeman Images/アフロ

作曲年代 1899年(1910年管弦楽編曲)

初演 1911年12月25日 パリ アルフレード・カゼッラ指揮

楽器編成 フルート2、オーボエ1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、ハープ1、弦5部

フェリックス・メンデルスゾーン(1809-1847)

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

フェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ(1809-1847)のヴァイオリン協奏曲ホ短調は、ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーのそれとともに、古今のあらゆるヴァイオリン協奏曲の中で、とりわけ人気のある名曲のひとつだ。

この曲は、作曲者の少年時代からの友人で、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターだったフェルディナント・ダヴィッド(1810-73)のために書かれた。メンデルスゾーンは自身でもヴァイオリンを演奏したが、この曲を作曲するときには、当代随一のヴァイオリニストだったダヴィッドにしばしば助言を求めた。作曲中、楽譜を見せられたダヴィッドの「真に偉大なヴァイオリン協奏曲はベートーヴェンただ1曲しかなかったが、もうすぐ2曲になるね」という言葉に、メンデルスゾーンは「ベートーヴェンと競うつもりはないよ」と答えたというエピソードが残っている。

曲は、協奏曲の伝統に従い、急緩急の3楽章をもつが、楽章間には短い連結部があり、全曲が休みなく演奏される。また、独奏ヴァイオリンが最初から最後までほぼ出ずっぱりで活躍するのもこの曲の特徴だ。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッショナート

短い序奏の後、独奏ヴァイオリンが有名な第1主題を弾き始める。この主題に続いて、シーソーレ#ーミーラ#ーシーという経過主題があり、その後、フルートとクラリネットが吹くト長調の第2主題となる。展開部ではおもに第1主題と経過主題が扱われる。展開部の終わりにはカデンツァがおかれているが、このカデンツァは、演奏者に任されるのではなく、すべて楽譜に書かれている。これは当時としては珍しいことだった。



フェリックス・メンデルスゾーン：ライプツィヒのトーマス教会
提供:Heritage Image/アフロ

メンデルスゾーンが、自宅アパートからライプツィヒのトーマス教会を見て描いた風景画。「ヴァイオリン協奏曲」についてフェルディナント・ダヴィッドに手紙を書いた1838年ごろに描かれた。ダヴィッドもこのアパートの近くに住んでいた。

第2楽章 アンダンテ

独奏ヴァイオリンの穏やかな主題で始まる。中間部は音楽が翳りを帯び、ティンパニのトレモロに導かれてメランコリックな主題が歌われる。この部分では独奏ヴァイオリンが重音を多用する。

第3楽章 アレグレット・ノン・トロッポーアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

短い導入部のあと、トランペットのファンファーレが鳴り、独奏ヴァイオリンが軽やかな第1主題を弾き始める。第2主題はオーケストラが力強く提示する。

作曲年代 1838年～44年(45年改訂)

初 演 1845年3月13日 ライプツィヒ フェルディナンド・ダヴィッド(vn) ニルス・ゲーゼ指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団

楽器編成 独奏ヴァイオリン、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

モデスト・ムソルグスキー(1839-1881) / モーリス・ラヴェル(1875-1937) 編

組曲「展覧会の絵」

1873年8月、モデスト・ムソルグスキー(1839-1881)の友人で、建築家・画家のヴィクトル・ハルトマン(ロシア語読みではガルトマン)(1834-1873)が、39歳で急死した。ムソルグスキーは、彼の早すぎる死に大きな悲しみを覚えた。

《展覧会の絵》は、ハルトマンの遺作展を見て感銘を受けたムソルグスキーが、その印象をもとに、わずか20日ほどで書き上げたピアノのための組曲だ。しかしこの曲は、作曲者の生前には演奏も出版もされることはなかった。

この曲を有名にしたのは、指揮者セルゲイ・クーセヴィツキーの依頼で行われた、ラヴェルによる管弦楽編曲だ。この管弦楽版は、初演されるやすぐに人気を博し、おかげで原曲の再評価も進んだ。ラヴェルはそのことを非常に喜んでいたという。

曲は、各作品の印象を描く10曲と、作品から作品へと歩く作曲者自身の姿を表す4曲の〈プロムナード〉からなっている。なお、原曲で〈プロムナード〉は5曲あったが、ラヴェルは編曲の際に、〈リモージュの市場〉の前にあった1曲を削除している。

1.プロムナード～ノーム(こびと)

ノームは地底に住む醜いこびと。ハルトマンの絵は、ノームを模したくすみ割り人形のスケッチだったと考えられている。

2.プロムナード～古い城

中世の城の前で吟遊詩人が歌う。アルト・サクソフォーンが旋律を吹く。

3.プロムナード〜チュイルリーの庭

パリのチュイルリー公園で、子供たちが遊んだり、口げんかをしたりしている。

4.ブイドロ

牛に引かれていくポーランドの荷車。

5.プロムナード〜卵のからをつけたひなの踊り

ユーリー・ゲルベル作曲、マリウス・プティパ振付のバレエ《トリルビー》(1871年初演)のための衣装デザイン。

6.サミュエル・ゴールデンベルクとシュミュイレ

金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人。なお、ハルトマンの絵は独立した二点の人物画なので、彼らを対話させたのはムソルグスキーのアイディアと思われる。

7.リモージュの市場

リモージュ(フランス中部の都市)の市場での女性たちのにぎやかな言い争い。

8.カタコンブ〜死せる言葉による死者への話しかけ

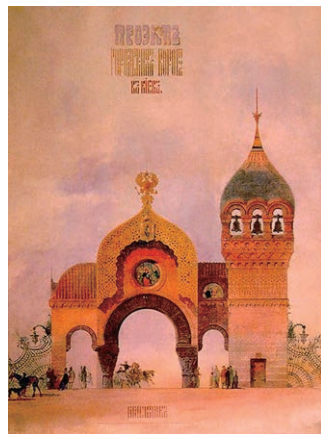
パリにあるローマ時代の地下墓地の厳粛な光景。ハルトマン自身がランタンの明かりで地下墓地を見学している。後半は〈死せる言葉による死者への語りかけ〉と題されているが、これは〈プロムナード〉の一種の変奏だ。

9.バーバ・ヤガーの小屋

バーバ・ヤガーはロシア民話に出てくる魔女で、鶏の脚の上に建つ小屋に住んでいる。

10.キエフ(キーウ)の大きな門

アレクサンドルII世を記念してキエフ(キーウ)に建設される予定だった「英雄の門」のコンペティションのためのデザインだが、この門は結局建設されなかった。



ヴィクトル・ハルトマン:キエフの大きな門
提供: Bridgeman Images/アフロ

作曲年代 1874年(1922年管弦楽編曲)

初演 1922年10月19日 パリ セルゲイ・クーセヴィツキー指揮

楽器編成 フルート3(うち2名はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(うち1名はイングリッシュホルン持ち替え)、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルト・サクソフォーン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バストロンボーン1、チューバ、ティンパニ、合わせシンバル、サスペンデッドシンバル、大太鼓、小太鼓、タムタム、チェレスタ、ラチェット、チャイム、グロッケンシュピール、木琴、トライアングル、ムチ、ハープ2、弦5部

A close-up, profile shot of a man with dark, slightly messy hair, looking upwards and to the right. He is wearing a dark, collared shirt. The background is a clear, bright blue sky. The lighting is soft, highlighting the contours of his face.

何をつなぐと、
心がつながるの
だろう。

相手のことを知る。

おたがいの価値を認めあう。

それを、ていねいに広げていくことで
いろんな人と心がつながる。



大和ハウス工業株式会社

本社 大阪市北区梅田3丁目3番5号 〒530-8241 Tel 06-6342-1310
東京本社 東京都千代田区飯田橋3丁目13番1号 〒102-8112 Tel 03-5214-2114
www.daiwahouse.co.jp